

## 日本イギリス哲学会 第57回 関西部会例会

日 時：2017年12月16日（土）13:00～17:50

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：13:00～14:30（討論を含む）

報 告 者：岡本 慎平（尾道市立大学 非常勤講師）

題 目：J・S・ミルと「不正」の態度適合分析

報 告 2：14:40～16:10（討論を含む）

報 告 者：門 亜樹子（京都大学大学院 経済学研究科 ジュニア・リサーチャー）

題 目：ビーティとプレヴォーの哲学史

ーバルベラック『道徳哲学史』との比較の観点からー

報 告 3：16:20～17:50（討論を含む）

報 告 者：梅田 百合香（桃山学院大学）

題 目：ホップズの『教会史 *Historia Ecclesiastica*』について

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、来年度7月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

久米 暁（関西学院大学、[exkume\[at\]kwansei.ac.jp](mailto:exkume@kwansei.ac.jp)）

竹澤 祐丈（京都大学、[Takezawa\[at\]econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp)）

\*[at]を@に直して下さい

## <会場案内>

キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る

（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）

TEL 075-353-9111



## ＜日本イギリス哲学会 第57回関西部会例会 報告要旨＞

### 報告 1 : J・S・ミルと「不正」の態度適合分析

岡本 慎平

価値の態度適合分析 (Fitting-Attitude Analysis) とは、「何か価値あるということは、それが特定の評価的態度の対象として適切だということだ」と考える立場で、価値を評価者のとるべき態度により分析する見解である。本発表では、J.S.ミルもまた、少なくとも正と不正について、この立場を取っていたことを示す。そのため、まずミルの道徳理論の「処罰可能性 (punishability)」基準と呼ばれる解釈を採用する。

ミルは『功利主義』において、「私たちは、人が何かをしたことに対して……何らかの方法によって罰せられるべきだということを含意しようとしなければ、何らかのものを不正 (wrong) と呼ぶことはない」(5.14)と述べ、これを「道徳一般をそれ以外の便宜性や有徳性の領域と区別する特徴的な違い」(5.15)だと主張する。上述の解釈によれば、ミルの道徳の構想は功利性の原理そのものではなく、この「処罰可能性」にある。

この箇所ではミルが行っているのは、「処罰すべきだという否定的態度の適切さ」による「不正」の定義だと解釈できる。そして同様の分析は「正しさ」にも適用できる。また、適合する態度ごとに評価語が異なると考えれば、ミルが「生の技芸」と呼んだ道徳以外の価値判断についても、同様の分析を与えられるだろう。(尾道市立大学 非常勤講師)

### 報告 2 : ビーティとプレヴォーの哲学史

—バルベラック『道徳哲学史』との比較の観点から—

門 亜樹子

自然法学の著作の仏訳者として知られるジャン・バルベラックの名前は、アダム・スミスやフランシス・ハチスンらの著作でも言及されている。彼の『道徳哲学史』(プーフェンドルフ『自然法と万民法』仏訳版訳者序文、1706年)の主要な内容は、聖職者批判と古代詩人から17世紀の道徳思想家に至る道徳科学の発展史から成り、正統派カトリック批判に重点が置かれている。本報告ではまず、バルベラックが使用した哲学史の整理を行い、『道徳哲学史』の特徴を考察する。

次に、トマス・リードやジョージ・キャンブルとともに、ヒュームの懐疑論を批判したアバディーン哲学協会のジェイムズ・ビーティの『真理の本性と不変性——詭弁及び懐疑論への反駁』(1770年)より「近代懐疑論の勃興と発展」(第2部第2章第1節)を中心に取り上げる。さらに、ピエール・プレヴォーによるスミスの遺稿集『哲学論文集』の仏語訳(1797年)における「訳者解説」(近代哲学史)の内容を紹介し、バルベラック、ビーティの哲学史との比較を試みたい。

(京都大学大学院 経済学研究科 ジュニア・リサーチャー)

### 報告 3 : ホップズの『教会史 *Historia Ecclesiastica*』について

梅田 百合香

本報告では、ホップズの『教会史』の概要を説明し、『リヴァイアサン』ラテン語版(1668年)、とりわけ附録三章との簡単な比較考察を行う。

『教会史』は、主としてローマ教会の歴史に関する著作であるが、2242行、103ページに及ぶラテン詩によって書かれたところに特徴がある。ホップズの死後1688年にロンドンで出版された。本書の執筆時期ははっきりしておらず、N. Malcolm は1671年9月から10月までは書かれていなかったと主張し、他方、P. Springborg は1664年には実質的に完成していたと主張している。前者に従えば、『教会史』は『リヴァイアサン』ラテン語版の後に書かれたことになり、後者に従えば、前に書かれたことになる。この執筆時期の認定の違いは、『リヴァイアサン』ラテン語版の異端に関する叙述が、ホップズが教会史について知識を深めた後に論じられたものなのか、それともその前なのかという問題と関わり、その意味は小さくない。本報告では、『教会史』と『リヴァイアサン』ラテン語版の叙述を比較しながら、どのような可能性があるのか論じる予定である。

(桃山学院大学)